

1896～1916年までの新聞での演奏批評の傾向とその意義

西澤 忠志*

Trends and Significance of Performance Criticism in Newspapers from 1896 to 1916

Tadashi NISHIZAWA

In the studies on the history of music in Japan from the Meiji era, numerous researchers have analyzed the changing attitude to western music by studying reviews. In particular, newspapers play a crucial role as the media for such reviews. However, these studies overlook the features of each media although they acknowledge that the transformation of music reviews is linked to social changes around the newspaper companies when interpreting criticism as the bridge between the music and the readers. For this reason, this paper points out the features of the relationship between music reviews and newspapers by examining the trends in the numbers published and the writers. These are three main features. Firstly, the number of music reviews increased rapidly after 1905, mainly due to intensified sales competition. Secondly, the majority of these reviews were authored by newspaper reporters with firsthand experience of musical performances. On the contrary, reviews written by musicians who graduated from the Tokyo Academy of Music are relatively scarce. Thirdly, music reviews in newspapers have served as the foundation for their counterparts in music magazines. Finally, this development of music reviews in newspapers is related to the expansion of western music, and it shows the process of its gaining appeal among readers.

キーワード：音楽批評、新聞、日本音楽史、メディア史、演奏批評

Keywords: music criticism, newspaper, history of music in Japan, history of media, performance criticism

* 立命館大学大学院先端総合学術研究科一貫制博士課程
tknnszwtds@gmail.com

Received on 2023/11/6, accepted after peer reviews on 2024/4/16

1. 序

1. 本稿の問題設定

本稿は、西洋音楽を対象とした演奏批評の新聞における展開を整理することにより、明治・大正時代初期の音楽史における演奏批評の意義の一端を明らかにするものである。

音楽史研究において新聞・雑誌に掲載された「批評¹」は、特定の音楽が受容され、評価される過程を明らかにする際の史料として用いられる。その変遷を対象とした日本の音楽批評史研究は、特に昭和時代以降の音楽批評の展開に注目してきた。例えば、長木（2010）は昭和期の音楽雑誌に掲載された「音楽批評」に関する議論に注目し、「印象批評」と「技術批評」、「匿名批評」、「肩書き」といったトピックの変化を整理している。しかし、長木（2010）は明治・大正時代の「音楽批評」については触れていない。これは、長木（2010）が昭和以前の音楽批評史を、音楽批評家である野村光一の記述に依拠しているためである（長木, 2010: 469）。この野村による日本の音楽批評史は、彼の経験に基づき、新聞・雑誌に掲載された「音楽批評」の展開を整理したものである。この中で野村は、「音楽批評らしい音楽批評」が現れたのは、第一世界大戦後に「邦人の演奏会や、海外から来日した第一流演奏家の華々しい発表会が催され、それが社会的ニュースとして新聞に取り上げられるようになってから」（野村, 1956: 15）としている。その一方で第一世界大戦以前の音楽批評については、「それ迄に演奏会評のごときものはなくはなかった。しかしすくなくとも評文めいたものになると、新聞には全く載せられず〔……〕多少音楽記事を扱はなくはなかったが、それは絶対に批評とは云ひ得ぬものであった」（野村, 1956: 15）と評価している。しかし、近年の日本音楽史研究では、1916（大正5）年以前の「音楽批評」にも注目している。特に白石美雪による一連の研究は、明治10年代の『東京日日新聞』、1897（明治30）年の『読売新聞』に掲載された「特定の音楽会の演奏を中心に論じるもの」（白石, 2012: 17）である「演奏批評」を対象に、明治時代における「音楽批評」の始まりとその成立過程を整理している。

これらの先行研究により、特に西洋音楽を対象とした「批評」が論じられた過程が明らかにされている。しかし、以上の先行研究の課題として以下の2点を挙げることができる。1点目は、野村光一など第一次世界大戦後に活躍した音楽批評家と、それ以前から活動していた「音楽批評」の書き手との違いについて触れていない点である。これは、日本の「音楽批評」の起点を、大田黒元雄が中心となって刊行された音楽雑誌『音楽と文学』に求めているためである。『音楽と文学』は1916年に大田黒元雄により創刊され、野村光一、堀内敬三などの西洋音楽を受容していた学生や青年による、同時代のヨーロッパで活躍していた作曲家に関する情報や、演奏批評を掲載した。特に大田黒元雄、野村光一、堀内敬三など、後に楽壇の中心的な活動をした音楽評論家を輩出したことに、音楽史上、大きな意味をもった（中曾根, 1990: 71）。こうした大田黒元雄や『音楽と文学』を「音楽批評」の嚆矢とする見方は、堀内敬三『音楽五十年史』（1942）によるものである。しかし、堀内の

¹ Maus（2001）によれば、音楽における「批評」の意味は、狭義のものと広義のものに分かれる。狭義の「批評」の場合、「音楽や音楽界の様相を評価する、通常は即時的な出版物のために作成される専門的な文章のジャンル」を指し、広義のものは、音楽教育、音楽についての会話、個人的な考察、そして音楽史、音楽理論、伝記などのさまざまなジャンルの文章を含む、「音楽を評価し、評価に関連する記述を行う一種の思考」を指す（Maus, 2001: 670）。また、「批評」に類似する言葉として「評論」という言葉があり、音楽に関するすべての出来事と行為に関する文筆活動を指すことが多い（海老澤, 2002: 123）。そのため本稿では、Maus（2001）が言うところの広義の音楽批評を「音楽評論」、狭義の音楽批評を「音楽批評」と分けて使用する。

記述は、「大田黒元雄は前述の優良図書を楽壇に送り、〔……〕且つ音楽批評を起こした。〔……〕音楽批評が後年に到つて興つたのも全く大田黒が先鞭をつけた結果である。」(堀内, 1942: 356)と、「音楽批評」の内容やそれ以前との違いについては触れてない。また、これらの「音楽批評」史を記述した堀内と野村は、『音楽と文学』の同人だったため、大田黒に近い人々による評価であることにも注意する必要がある。

2点目は、「批評」と新聞や雑誌というメディアの特性との関わりについて触れていない点である。南田(2018)によれば、「批評」という行為を作品と読者とのコミュニケーションをつなぐメディアとして捉えた場合、社会状況などの諸条件により「批評」の論調は変化する(南田, 2018: 174)。特に新聞に掲載された欧米の「音楽批評」の場合、他紙よりも早く情報を出して売り上げを伸ばすために、雑誌よりも記事の締め切りが早くなったことから、締め切りに間に合わせるためにプログラムの前半部分が重視された(Dingle and McHugh, 2019: 699)。このように先行研究によれば、速報性に代表されるような新聞の特性は、「批評」の内容にまで影響を及ぼしているとみることができる。

2. 本稿の具体的な研究対象および方法論について

以上の課題をもとに、本稿は、大田黒元雄以前の日本の「音楽批評」がメディアの性質とどのように関わりつつ展開したのかを、新聞に掲載された演奏批評の動向から明らかにする。

本稿が新聞を対象とする理由は、音楽批評家が楽壇に登場するきっかけとして、新聞の音楽批評が挙げられているためである。例えば野村光一は、音楽会のニュースをいち早く取り上げた新聞として『東京日日新聞』、『読売新聞』、『都新聞』を挙げ、これらの新聞に、特に第一次大戦中に来日した演奏家に対する大田黒元雄をはじめとする音楽の専門知識を持つ人々による批評が掲載されたことから、音楽批評家は楽壇に登場したとしている(野村, 1956: 15-16)。こうした評価は、先述したように、大田黒に近い立場からの評価であることに注意が必要である。しかし、大田黒の他にも、野村胡堂や増沢健美など、新聞をきっかけに音楽批評家として活動を始めた人物がいることから、新聞に音楽批評が掲載されたことは、それまで西洋音楽に関心を持っていた人々が音楽批評家として活動するきっかけとなったと考えられる。

また、本稿は「音楽批評」の中でも狭義に該当し、特に演奏の巧拙を取り上げた「演奏批評」を取り上げる。これは、野村が指す「音楽批評」の意味が、「音楽全般について語った言説」ではなく、「特に演奏の巧拙について論じた」演奏批評であること(長木, 2010: 471)、特に明治時代に「批評」と呼ばれた言説は、対象の巧拙を中心に論じられたこと(木村, 2002: 19)によるものである。

本稿が対象とする新聞は、1896(明治29)年から1916年までに、特に西洋音楽の演奏が盛んに行われていた東京で発行された、『読売新聞』『東京朝日新聞』『毎日新聞』『東京日日新聞』『都新聞』『日本』『時事新報』の7紙である。これらの新聞に限定した理由は、新聞の読者層と記事内容に関連があることが先行研究で指摘されており、演奏批評が掲載され始めた目的を、読者層の変化から検討することができるためである。例えば、明治30年代の東京で発行された新聞を比較すると、『読売新聞』の場合、文学や教育記事と美術記事を掲載したことから、文学を愛好する、学生などの教育水準の高い知識人読者と商人が読者層の中心となった(山本, 1981: 106-107)。その一方で『東京朝日新聞』は、経済記事を中心に政治、娯楽記事、政治論説、小説、講談の記事を掲載し、あらゆる階層を読者として想定したことから、中小商人を中心に、実業家、学生、家庭など、多くの階層の人々が読者となったが、その紙面の内容には際立った特徴が見られない(山本, 1981: 131-132)。

こうした内容による読者層の広がりや、新聞ごとの一日平均発行部数にも影響を与えている。例えば、1906年と1907年に東京で発行された新聞7紙の一日平均発行部数と「社運²」を比較した場合、学生や知識人など読者層を限定した『読売新聞』『東京日日新聞』『日本』『東京毎日新聞』が部数を減らしている一方で、商人など読者層を広げた『東京朝日新聞』『都新聞』『時事新報』は部数を増やし社運は「隆盛」に向かっている。

表1 新聞7紙の1906年と1907年の一日平均発行部数と「社運」

新聞 調査 年月	東京朝日新聞	都新聞	読売新聞	時事新報	東京日日新聞	日本	東京毎日新聞
1906年 1月	81000 大ニ振フ	63350 大ニ振フ	38000 稍振フ	35500 稍振フ	31000 稍振フ	30000 稍振フ	12500 不振
1906年 9月	81000 大ニ振フ	63350 大ニ振フ	38000 稍々振フ	36000 稍振フ	31000 稍々振フ	30000 稍々振フ	9500 不振ナリト雖 トモ維持スル ニ足ル
1907年 11月	81000 大ニ振フ	78000 隆盛ニ向フノ 状アリ	32000 稍振フ	41000 隆盛	24000 稍ヤ振フ	27000 稍ヤ振フ	24000 稍ヤ振フ

「新聞社内状調」（1906年1月調）、「新聞紙通信社一覧」（1906年9月調）、「新聞紙通信社一覧表」（1907年11月調）（『原敬関係文書 第八巻書類篇五』所収）をもとに筆者が作成

また、本稿が取り上げる演奏批評の範囲を以上の時期に限定する理由は、1896年に演奏に対して「批評」と題された記事が新聞に掲載され始めたこと、1916年に「音楽批評」の起点として見なされている『音楽と文学』が創刊されたためである。

3. 本稿の構成

本稿の構成は以下の通りである。最初に、本稿の前提である、明治時代の演奏会と新聞での演奏会報道と「批評」の展開をまとめる。これは、日本において批評が掲載される要因として、展覧会などの作品を発表する機会と、ジャーナリズムの発達が指摘されているためである（中村, 1981: 234）。次に、1896年から1916年の東京で発行された新聞における西洋音楽に対する演奏批評の目録（西澤, 2021）をもとに、各新聞での演奏批評に共通する特徴と、その原因として第1節でまとめた演奏会とジャーナリズムでの批評の展開との関係を提示する。最後に、各新聞に掲載された演奏批評が同時代の音楽界においてどのような意義を持ったのかを、音楽家からの反応をもとに考察する。

以上を通じて本稿は、日本において「音楽批評」が新聞メディアの中でどのように位置づけられた上で展開され、それが日本の音楽史でどのような意味を持ったのかを明らかにする。

² ここで使用される「社運」という言葉は、警視庁内の人物によって使用された、会社の盛衰を評価した言葉である。

II. 演奏会、新聞での演奏会報道、批評の展開

1. 明治時代における西洋音楽の演奏会の展開

1853（嘉永6）年のペリー来航から西洋音楽が受容される中で、公開演奏会は軍楽隊、音楽学校、音楽団体が主催者となって開催された。まず、明治10年代以前の日本での公開演奏会は、軍楽隊あるいは居留地在住の外国人によって開催された。しかし、日本人にとって西洋音楽は馴染みのある音楽ではなかったため、公開演奏会での日本人の聴衆は少数にとどまった。明治10年代後半に入ると、それ以外の場でも公開演奏会が実施された。例えば、1885（明治18）年には東京音楽学校（現、東京藝術大学音楽学部）の卒業式において、卒業生が修めた技能を世間に公表することを目的とした卒業演習会が実施された。また、東京音楽学校の教師、雅楽寮の伶人、外国人が出演する慈善演奏会や音楽鑑賞団体の日本音楽会主催による演奏会が開催され、公開演奏会がより多くの場で実施された。

日清戦争後の明治30年代には、東京音楽学校の定期演奏会、軍楽隊による日比谷公園での野外演奏会、そして同声会や明治音楽会などの新たな音楽団体による演奏会が開催された。特に、東京音楽学校の定期演奏会や音楽団体による演奏会には、学生や知識人が定期的に訪れ、聴衆となった（堀内, 1942: 279）³。また、1905（明治38）年に完成した日比谷公園奏楽堂での軍楽隊による野外演奏は無料で聴くことができたため、学生や知識人だけでなく、さまざまな人々が西洋音楽に接することができる機会となった（堀内, 1942: 273）。これに加え、唱歌教員や教材の充実などから唱歌教育が整備されたことにより、明治30年代半ばから西洋音楽が人々の中に取り入れられていくようになった。例えば、1904（明治37）年から1918年にかけての演歌は、それまでの西洋音楽の旋律を民謡あるいは俗曲調に編曲した演歌と異なり、西洋音楽の旋律をそのまま借用あるいは西洋音楽の作曲法に基づいて作曲された演歌が増加する（権藤, 1989: 4）。この理由には、明治30年代に入ると政治的主張という演歌の機能が衰えてきたため、人々の注目を集めるためにヴァイオリンや唱歌といった西洋音楽の楽器と音楽を導入する必要があったからである（権藤, 1989: 9）。そのため、慈善演奏会や祝勝会、そして学校の演奏会では日本音楽とともに「和洋調和楽⁴」や西洋音楽が併せて演奏された。そして明治40年代には、帝国劇場でのオペラの上演、学生による音楽団体の設立、そして外国人演奏家の来日といった、東京音楽学校や軍楽隊だけでなく人々による演奏会も開催された。

2. 新聞における音楽関係記事の展開

以上の公開演奏会の展開の中で、明治初年度から新聞における演奏会報道や音楽評論が掲載されるようになる。例えば『東京日日新聞』では、1875（明治8）年から1888（明治21）年、福地源一郎が主筆に在籍したときに演奏会報道や音楽評論が掲載され、その中での演奏会報道は、演奏会の会場、参加者などの全体的な状況を詳述し、演奏の特徴を言葉で伝えようとした（白石, 2010: 52）。

明治20年代からその場の様子を伝えるだけでなく、曲目や曲目解説も掲載されるようになる。例

³ 堀内（1942）は、学生が東京音楽学校などの演奏会に聴衆として参加し始めた時期を「むずかしい高級な曲をやるやうになつてから」としている（堀内, 1942: 279, 285）。東京音楽学校の「明治三十二年度年報」によれば、「本校事業ノ成績ヲ報告シ併テ芸芸ヲ奨励」することを目的として定期演奏会を開催し、「諸学校生徒其他」を入場させたとしている。ここから、明治30年代から東京音楽学校の演奏会の聴衆は、学生を主としていたことがわかる。

⁴ 日本音楽を西洋の楽器で演奏できるように編曲した作品。

例えば、『読売新聞』1891年3月14日掲載の「同好会の音楽会」では、東京音楽学校関係者による演奏会の予告として曲目と演奏者の名前を掲載した（無署名, 1891: 2）。また、『読売新聞』1893年11月24日に掲載された雅楽協会による演奏会の予告記事には、演奏する曲目とともにそれらの解説も掲載した（無署名, 1893: 3）。この時期の音楽評論は、同時期の音楽界で議論された課題を取り上げたものだった。例えば『読売新聞』1891年8月1日から5日にかけて連載されたS.I.（伊藤蘇水⁵）「音楽改良論」は、国の風俗と「音楽」との関連性を認める儒学的音楽観を前提に、江戸時代における風俗が退廃した原因を「淫靡なる音楽」に求め（S.I., 1891a: 1）、「音楽改良」の方法として、西洋音楽に傾斜した学校教育の方法を変えること、特に「俗曲」の改良を進めることを求めている（S.I., 1891b: 1）。卑猥な「俗曲」をどのように「改良」するかという議論は、文明開化と歌舞音曲の「改良」が求められた状況を背景に、東京音楽学校でも行われた。同校では、三味線や浄瑠璃等を俗楽の中でも最も卑しい「淫楽」と位置づけ、その「弊害」が最も少ない箏曲を五線譜に採譜し、恋の歌を花鳥風月の歌詞に変更するといった「改良」が実施された（平田, 2012: 33）。『読売新聞』に掲載された「音楽改良論」も、こうした「俗曲改良」の流れの中で連載されたものと考えられる。また1890（明治23）年から1891（明治24）年にかけて東京音楽学校の存廃が議論された際に、『東京朝日新聞』では10回に分けて同校を擁護する社説を掲載している（東京芸術大学百年史編集委員会, 1987: 305）。

明治30年代からは、「音楽」に関連する記事の内容が変化する。まず、『読売新聞』では、西洋音楽受容を推進する立場から「音楽」界全体に対する論評が掲載され（白石, 2012: 1）、1895（明治28）年に掲載され始めた文芸欄「月曜付録」「日曜付録」には、西洋音楽の紹介記事や日本音楽と西洋音楽とを比較した記事のように、広く「音楽」を取り扱う記事が掲載された。

明治40年前後から、新聞に「音楽」を専門的に取り扱った欄が設けられた。例えば『読売新聞』では、1907（明治40）年10月4日に「音楽界消息」の欄が設けられ、日本音楽と西洋音楽の演奏会の予告記事を掲載した。「音楽界消息」はその後、「音楽界」と名前を変えて1908年まで掲載された。そのため、『読売新聞』の「音楽欄」の場合は短期間のうちに掲載されたが、こうした「音楽」のみを掲載した欄は、同時期の『東京朝日新聞』（「音楽界」1906年2月3日6面）などの他の新聞にも確認できる。

3. 新聞における批評の展開

明治初年度における日本の新聞は、大新聞と小新聞に分けられる。大新聞は、漢学の知識を持った旧士族などのリテラシーの高い読者層を対象とした文語体の政治評論を掲載し、その一方で小新聞は、旧町人などのリテラシーの低い読者層を対象とした口語体の戯作者による報道を中心に掲載した。しかし、大新聞に掲載された政治評論が民権論や急進的な内容であったことから、新聞紙条例を中心とする政府による言論統制を受けたため、大新聞は明治10年代後半から衰退し、その一方で、小新聞は大新聞で展開されていた政治評論を取り入れたため、明治20年代には、大新聞と小新聞との差はほぼなくなった。また、明治20年代には政治評論を中心としながら不偏不党を自紙の立場とした独立新聞や大都市の中流・下層階級を読者層とした『万朝報』などの、それまでの大新聞

⁵ 『読売新聞』に掲載された当初はイニシャルの「S.I.」のみだったが、『蘇水遺稿』に「音楽改良論」が収録されているため（伊藤, 1893: 119-142）、本稿では「S.I.」を伊藤蘇水と判断した。

や小新聞とは異なる傾向の新聞が創刊された。そして明治30年以降、学校教育を通じてリテラシーを持った潜在的な受け手層が現れたことから、新たな読者層が現れ始めた（山本, 1978: 136）。この新たな読者層とは、中学生以上の学生とその卒業生を中心とする新興知識人読者（山本, 1981: 191）、車夫や馬丁といった下層読者層（山本, 1981: 193）、そして婦女子などの家庭読者層（山本, 1981: 196）である。これに加え、発行部数の急激な増加、日清戦争や日露戦争の報道合戦、輪転機の使用の本格化、写真版や多色刷り印刷などのさまざまな印刷技術の進歩を通じて、新聞は企業としての発展を遂げていった（春原, 2003: 90-91）。この中で、各新聞では新たな読者層を獲得するために、ルビ付き活字の採用などの内容の平易化（山本, 1978: 136）、美人コンクールなどの催し物の開催（春原, 2003: 122）などの多くの試みがなされた。

新聞における批評は、まず小新聞に掲載された。そして明治時代において新聞は、対象となる文学、美術、演劇を論じる際の主要なメディアとなった。例えば、劇評の場合、それまでは芝居の「約束事」を熟知し、旧来の評判記の筆致を継承する六二連が主に『俳優評判記』において劇評を発表したが、明治10年代から、写実・合理偏重を特色とする新たな劇評が小新聞に掲載された（矢内, 2011: 28）。新聞の劇評は歌舞伎に造詣が深くない新聞記者によって書かれたため、それまでの劇評の担い手からその知識と鑑賞眼の欠如を批判されたが、旧来の筆致が適合しなくなったことから、明治20年代から30年代にかけて劇評は新聞がほぼ独占することとなった（矢内, 2011: 30-31）。また、こうした新聞で批評を担った新聞記者は、後に文展の審査員などを通じて美術界に関与した『読売新聞』の美術記者である関如来のように、批評の対象となった分野にも関与するようになった。これらの点は、時代を経るごとに新聞における批評の価値が、各分野で認められていったものとして捉えることができる。

III. 1896年から1916年の新聞における西洋音楽に対する演奏批評の動向と特徴

1. 1896年から1916年までの新聞における演奏批評の概観

まず、1896年から1916年までの新聞における演奏批評の歴史を概観する。日本語による最初の演奏批評は、1890年に日本で初めての音楽雑誌である『音楽雑誌』第1号に掲載された、横浜で発行されていた欧字新聞 *The Japan Weekly Mail* 掲載の演奏批評を邦訳したものである（馬場, 1959: 463）。一定の評価基準をもとに演奏の巧拙に踏み込んだ演奏批評は、1893（明治26）年に第一高等学校の『校友会雑誌』に掲載された、校内の演奏会を対象としたものが初出である（西澤, 2019: 51）。新聞に掲載された最初の演奏批評は、1896年に『読売新聞』に掲載された、上田と榊保三郎の連名による演奏批評と考えられる⁶。上田と榊が演奏批評を掲載した経緯は不明であるが、前年に、当時『読売新聞』の記者だった関如来の推挙によって、上田が坪内逍遙の戯曲『桐一葉』を批評した記事を掲載したことから⁷、文芸記者の推挙によって掲載したことが考えられる。その後、『読売新聞』だけでなく、『毎日新聞』、『東京朝日新聞』などの他の新聞でも、西洋音楽を対象とした演奏批評が掲載された。

⁶ さかき・うへだ「同声会演奏批評」『読売新聞』1896年11月11日1面。

⁷ 樋口一葉の「水のうへ日記」によれば、1895年10月7日に関如来が来訪した際の会話の中で、坪内逍遙が当時帝國大学学生の高山樗牛が書いた『滝口入道』を批判したことに対抗して、『桐一葉』の批評を同大学学生の上田敏に依頼することを話している（樋口, 1895=2002: 164）。

なお、日本音楽を対象とした演奏批評が新聞に定期的に掲載され始めるのも、西洋音楽とほぼ同時期と考えられる。例えば、四谷のちかは『読売新聞』に掲載された、初代萩岡松柯（松韻）主催の「琴曲合奏会」を批評した記事で、同時期に神樹生（榎保三郎）が西洋音楽を対象にした演奏批評を発表していることでその発達に貢献している一方、日本音楽の演奏に対する批評を通じてその木鐸となり、発達を慮る人物がいないことを問題視し、この前提のもとで演奏された曲を批評するという、自身の立場を表明している（四谷, 1898: 1）。また、この批評は、演奏された各作品を批評し、最後にあとがきを入れるという神樹生による批評のスタイルを模倣したものと考えられる（白石, 2012: 26）。その後、長唄の演奏団体である長唄研精会に代表される、日本音楽の演奏者による演奏団体が結成され始めると、『読売新聞』以外の新聞でも、それらの演奏会を対象とした演奏批評が掲載された。

2. 掲載数の推移の特徴

1896年から1916年までの新聞7紙での演奏批評の掲載数の推移は、以下の通りである。

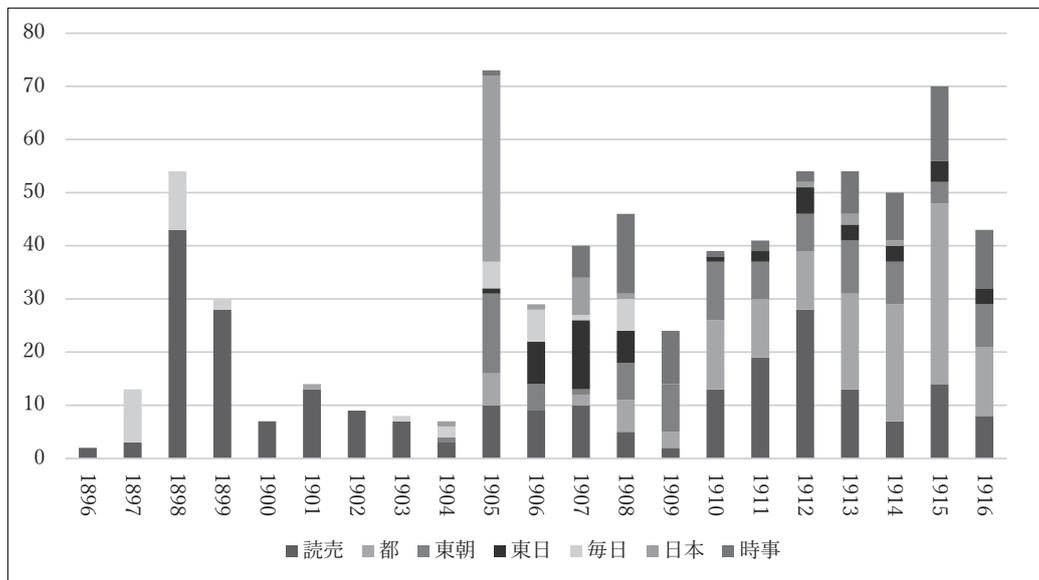


図1 1896年から1916年までに新聞に掲載された演奏批評
西澤（2021）の内容を確認の上で、筆者が作成

以上の特徴を2点にまとめることができる。

1点目に、1896年から1904（明治37）年までに演奏批評を掲載した新聞は、『読売新聞』と『毎日新聞』がその多くを占めていることである。特に『読売新聞』の場合、1898（明治31）年に掲載数が急増し、その後も継続して演奏批評を掲載している。また、『毎日新聞』の場合、特に同紙記者の坂部行三郎が、ペンネーム（さ、こ）を使用しつつ、続き物の批評を掲載している。以上の2紙で演奏批評が掲載され始めた理由は、日清戦争後の新聞界で販売競争が始まったことによるメディア戦略の一環だったことが考えられる。明治30年代の『読売新聞』は他紙に比べて、特に教育記事や美術記事、そして文学記事を盛んに掲載したため、文学を愛好する学生を中心とした知識人読者を多く獲得した（山本, 1981: 105）。そのため、同時期の『読売新聞』は「文学新聞」として独自の地位を得ていた。また同時期の『毎日新聞』は、クリスチャンでもあった社長の島田三郎のもとで、

新聞を読者の育成を目指したオピニオン・ジャーナリズムとして位置づけ、足尾鉍毒事件などの社会問題に取り組む姿勢をとった（門奈, 1999: 1-3）。そのため、読者層は一部のクリスチャンの学生⁸に偏ることとなった（山本, 1990: 239）。注目すべきは、この2紙の読者層は同時期の西洋音楽の受容者層である、洋書あるいは居留地を通じて西洋音楽を受容していた学生、あるいは讚美歌を通じて西洋音楽を受容していたキリスト教関係者と重なることである。しかし、以上の2紙は他紙から年間発行部数で差を付けられていた。例えば、2紙が演奏批評を掲載する直前に当たる1896年の東京での年間発行部数は『読売新聞』が約470万部、『毎日新聞』が約270万部である一方で、幅広い読者層を得ていた『万朝報』は約1655万部と8倍から4倍近い差を付けられていた（警視庁, 1997: 104）。これに対し、発行部数を増やすためのメディア戦略として、『読売新聞』では編集長中井喜太郎によって「毎日の紙面に一項以上他社の新聞にない新奇の記事を掲載すること」「紙面を趣味をもって満たすべきこと」「国是を痛論するの社説を掲載すること」を編集方針とした（読売新聞社社史編纂室, 1955: 154-155）。また『毎日新聞』では、1897年の「社告」で、小説欄、経済欄を充実させることを明言した（門奈, 1999: 1）。こうした、メディア戦略の一つとして、演奏批評が掲載されたことが考えられる。しかし、『読売新聞』の演奏批評は、継続的に掲載していた楽石生（伊沢修二）が1900（明治33）年に入院した後、同時期に島村抱月によって新たに設けられた文芸欄「月曜付録」にも同紙記者の正宗白鳥らによって掲載されたが、掲載数は減少している。また、『毎日新聞』はそれまで同紙で演奏批評や文芸関連記事を掲載していた坂部行三郎による記事が1899（明治32）年以降に見られなくなってから演奏批評の掲載数は減少し、1903（明治36）年まで演奏批評は掲載されていない。

2点目に、1905年以降、『日本』、『東京朝日新聞』、『都新聞』などの新聞でも、演奏批評が掲載され始めた。特に『日本』の場合、1903年までは、西洋音楽に関する報道あるいは評論は掲載されていないが、1904年から掲載され始め、1905年には同紙記者の安藤正純が、東京音楽学校に在学していた弟の弘の補助のもとで、演奏批評と音楽の紹介記事を掲載した（長谷川, 1957: 645）。『日本』がこの時期に演奏批評を掲載し始めた理由として考えられるのが、日露戦争後の新聞間での販売競争の激化である。明治30年代までの『日本』は、陸羯南の編集のもとで言論によって政治を動かす政論新聞を理想像として、政論を中心にした紙面づくりを行っていた（山本, 1981: 111）。しかし、読者を教養があり政治意識の高い知識人に限定したため（山本, 1981: 111）、政治に関心を持たない新興の読者を取り込む姿勢に欠けていたこと（山本, 1981: 150）、陸の社説の減少と社説の内容が首尾一貫性を欠けていたこと（有山, 2007: 223）から、日露戦争以降、経営不振に陥った（有山, 2007: 258）。そのため、1904年以降、編集長の古島一雄による紙面改革が行われ、相撲などのスポーツ記事の掲載（有山, 2007: 258）、婦女子童向けにルビを振る⁹（無署名, 1904: 1）、などの新たな読者を呼び込むための取り組みがなされた。こうした取り組みは、他紙でも行われた。特に『東京朝日新聞』の場合、1907（明治40）年に夏目漱石を招聘し、1909（明治42）年から1911（明治44）年にかけて

⁸ 島田三郎が『毎日新聞』で取り上げた社会問題の中には、廃娼問題や足尾銅山鉍毒問題のように、キリスト教関係者が関わっていたものも含まれる。この社会問題に対する学生からの関心は高かったことが考えられる。例えば、『毎日新聞』記者の木下尚江などのキリスト教関係者が引率した、足尾銅山への鉍毒地視察修学旅行では、東京府下の1,000余人の学生が参加した（板倉町史編さん委員会, 1978: 83）。

⁹ 特に明治時代の新聞界の中で、難解な記事は知識階級用、ルビつき記事は大衆用という色分けがされていた（小林, 2002: 122）。

て彼の編集による「文芸欄」を設けた。「文芸欄」が設けられる前にも『東京朝日新聞』には演奏批評が掲載されたが、「文芸欄」開設後は続き物として掲載された他、演奏されたすべての作品を批評の対象とした内容となった。こうした「文芸欄」に長文の演奏批評を掲載したのは、『時事新報』、『都新聞』でも同様である。

そのため、明治時代の諸新聞は、特に同時期の西洋音楽の主要な聴衆層だった学生などの知識人層を読者として獲得するための活動の一環として、演奏批評を掲載したことが考えられる。

3. 執筆者の推移の特徴

次に、演奏批評の執筆者の推移は、図2の通りである。

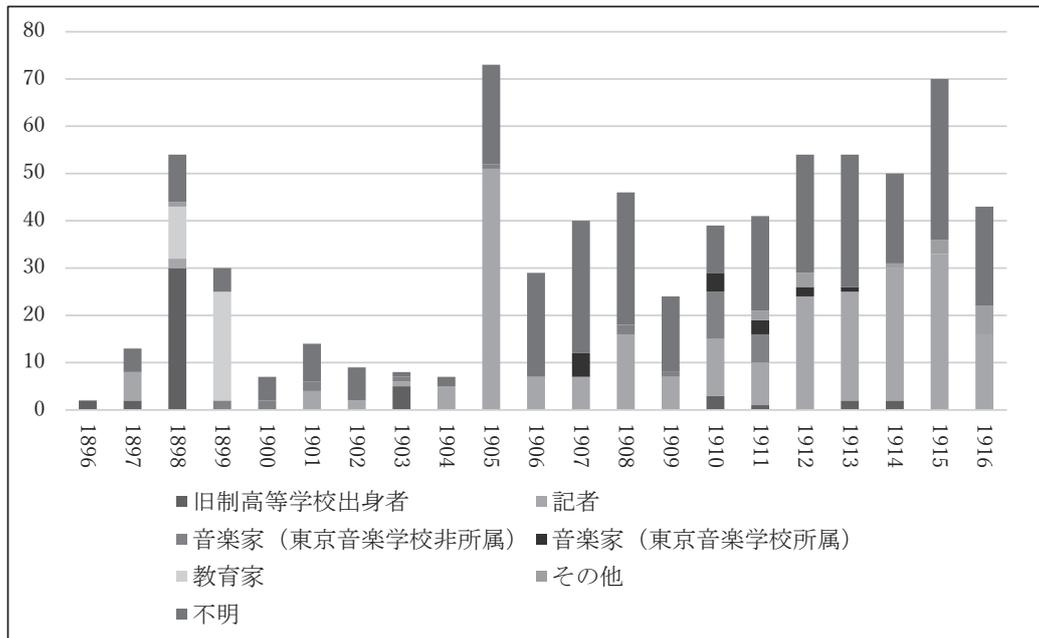


図2 新聞での演奏批評の執筆者の推移
西澤（2021）の内容を確認の上で、筆者が作成

図2の特徴は、以下の2点にある。

1点目は、日本での新聞の演奏批評はほとんどの場合、新聞記者が執筆したことである。加えて、これらの新聞記者は、入社以前から音楽と何らかの関わりを持っていた。例えば、『東京朝日新聞』で1908（明治41）年から「篆隸子」の雅号を用いて演奏批評を発表した社会部記者の西村眞次は、彼の日記によれば、彼が入社する前の1907（明治40）年から、寝る前にヴァイオリンを弾き、またヴァイオリンを他人に貸し出してもいた（西村, 1907: 190, 192）。こうした音楽を愛好していた新聞記者が演奏批評を担当したことは、『毎日新聞』と『都新聞』の記者である白井嶺南も同様である。しかし、彼らは演奏批評を担当するために入社したわけではない。例えば、白井が『毎日新聞』で演奏批評を掲載することとなった経緯は、同志社在籍時にオルガンを演奏した経験があり（三輪, 1943: 31）、西洋音楽を知っていることから編集長に依頼されて演奏批評を執筆したと回想している（白井, 1930: 23）。『都新聞』に入社した際も、当初は家庭欄や相談欄を担当するためであった（土方, 1991: 171）。こうした音楽に関する記事を執筆した新聞記者は、明治40年代以降、音楽記事の専門家として新聞社内で位置づけられた。例えば『東京日日新聞』に掲載された帝国劇場の月興行に対

する劇評では、プッチーニ作曲のオペラ《蝶々夫人》に対し、「日本の室内の道具で日本の衣裳で伊太利の唄、既に調和を欠く上に天理教式の踊りで暗中模索の態、これは最う一工夫も二工夫もすべきもの」と衣装や踊りが和洋の調和がとれていない点を指摘している一方、「音楽上の技倆は同人長江君本欄に於て述べたり」と演奏に対する言及を避けている（鎗ン坊, 1914: 6）。ここから、加藤長江は演奏について専門的に言及する記者として捉えられていたことがわかる。また、音楽関連記事を執筆した新聞記者の中から、音楽に関わる記事を書く「音楽記者」としての自覚を持って活動をする人々も現れた。例えば白井嶺南の場合、音楽の普及と発展のために新聞・雑誌の音楽に関わる記者が一致協力することを趣旨とする音楽記者クラブ「音楽春秋会」を同時期に組織し¹⁰、賛同者として西村眞次などの各新聞社で西洋音楽に関する記事を書いていた記者が名を連ねた（揚子生, 1921: 23）。これらの新聞記者による「演奏批評」は、続き物による批評は少なく、演奏会の翌日に掲載された単発の短評がほとんどである。しかし白井嶺南の場合、『都新聞』で演奏批評を掲載する際に、最初に演奏会の短評を掲載し、後日演奏された作品をすべて取り上げた長文の批評を文芸欄に掲載することで、速報性と内容の充実を両立させた¹¹。

2点目は、新聞記者による演奏批評に比べて、音楽家による演奏批評の掲載数が少ない点である。加えて、演奏批評を発表した音楽家のほとんどは、その当時、音楽家養成を目的の一つとしていた東京音楽学校に属していなかった。例えば、『東京朝日新聞』の「文芸欄」で演奏批評を掲載した中島六郎は、東京音楽学校選科の卒業生であるが、演奏批評を発表した時期は音楽塾を経営していた（瀧井, 2018: 167）。また、伊沢修二¹²や東儀鉄笛など東京音楽学校と関わりのあった人物も、演奏批評を発表した時期は、東京音楽学校に籍をおいていなかった。例外的に、東京音楽学校在学中に音楽雑誌の主筆を務めていた小松耕輔は、1907（明治40）年から『日本』、『読売新聞』、『時事新報』といった新聞に演奏批評や音楽評論を発表した。また、小松は新聞に発表した記事を自身が編集を担当した音楽雑誌に転載し、新聞の読者ではない、特に音楽雑誌の読者層である音楽家に対して、自身の見解を公表した。また、大田黒元雄やセノオ楽譜を刊行した妹尾幸陽のように、後に音楽評論家として活動する人々が、音楽雑誌に自身の評論を掲載する前の最初のキャリアとして、新聞で演奏批評を発表している。

IV. 新聞における演奏批評に対する西洋音楽界からの反応

こうした新聞における演奏批評は、同時代の音楽界でも注目されていた。例えば、1896年に上田敏と榎による演奏批評が『読売新聞』で掲載された際には、評価の妥当性を疑問視した東京音楽学校生徒の幸田幸と由比くめの連名による反論が同紙に掲載された（幸田・由比, 1896: 1）。これに加えて、当時刊行されていた音楽雑誌『おむがく』には、幸田と由比の反論を宥めつつも、上田と榎

¹⁰ 「音楽春秋会」の具体的な発足年は、1906（明治39）年から1908（明治41）年まで、白井の回想記事における記述が異なるため、本論では明治40年代と判断するにとどめる。

¹¹ 例えば、1914年6月27日に開催された銀鈴会の演奏会に対しては、翌日に短評（れ「銀鈴会演奏会」『都新聞』1914年6月27日5面）を掲載し、後日、1面に長文の批評（嶺「銀鈴の妙なる響」『都新聞』1914年6月30日1面）を掲載している。

¹² 伊沢修二は1891年に東京音楽学校校長などの官職を辞し、台湾総督府学務部を経て貴族院請願委員となっていた（上沼, 1962: 183）。そのため、1898年から1900年まで『読売新聞』で演奏批評を発表した時期の伊沢は、東京音楽学校に籍はおいていなかったことがわかる。

による演奏批評は「悉く正鵠を得たるものとは誰しも認めざるべけれ」（無署名, 1896: 39）と、彼女らと同様に評価の的確さを疑問視した。

このように、新聞での演奏批評に対する音楽家からの反応は、ほとんどの場合、音楽に関する知識の誤りを指摘し、評価の妥当性を問うものである。特に明治30年代以降の音楽雑誌では、新聞での演奏批評などの音楽記事が増加するに伴い、新聞に掲載された音楽関連の記事を収集、論評を加えた記事を掲載した。例えば『おむがく』では、『読売新聞』と『毎日新聞』で演奏批評が掲載され始めた明治30年に「音楽に関する編纂著述等の批評を移し植えて読者諸君の縦覧に供」する（編者, 1897: 31）ことを目的とした「評林」欄が設けられ、新聞に掲載された音楽記事及び演奏会批評を転載した上で、それに対する論評を行った。こうした新聞に掲載された音楽記事への論評は、明治40年代に創刊される『音楽界』や東京音楽学校学友会発行の『音楽』にもみることができる。

特に明治30年代以降、音楽家によって音楽雑誌が創刊され、「音楽」に関する言論が活発化する中で、「音楽批評」が重視された。特に小松耕輔の場合、音楽家が不満を持つだけでなく、自ら記事を書いて提案しなければ状況は変わらないという危機感を背景に（二子, 2017: 16）、新聞と雑誌の「批評」を重視した。例えば、彼が編集を務めた『音楽界』では、発刊の際に冒頭で、「我「音楽界」は最も厳正誠実なる、楽界の批評者なることを公言する。」（玉巖, 1908: 10）とし、「音楽批評」を雑誌の目的の一つとして位置づけ、定期的に演奏批評と音楽時評を掲載した。

また音楽雑誌で演奏批評が掲載されただけでなく、特に、新聞に演奏批評を掲載した音楽家や記者は、理想の「音楽批評」について論じた。例えば、『日本』で兄の演奏批評に協力していた安藤弘は、同紙に演奏批評が掲載されなくなった後に「音楽の批評に就て」を発表している。その中で安藤は、新聞・雑誌に掲載された「音楽批評」は報道に留まり音楽界を指導するものではないこと、音楽界を牽引するはずの東京音楽学校が同時代の思潮や西洋音楽を無視して古典派の音楽ばかりを演奏していることを問題視し、これを解決するために、音楽界の演奏技術偏重の傾向を改め、「批評」によって音楽界を指導する人材を育てることを求めている（安藤, 1908: 100-102）。

こうした、音楽界を牽引する「音楽批評」の不在への問題意識は、大正・昭和時代に「音楽批評」を発表する人々にも引き継がれた。例えば大田黒元雄の場合、『音楽と文学』の演奏批評では「批評家」という自意識のもとで、演奏の巧拙を論じた。こうした態度の違いは、1916年12月3日に東京音楽学校奏楽堂で開催された「久野久子女史恢復祝賀演奏会」に対する批評に見ることができる。この演奏会に対する『都新聞』に掲載された白井嶺南の批評は、「楽其物から観たならば又弾奏振りを評したならば、云ふべきこともあらう」としつつも「併しながら危かしい処なく、そして本気に熱情を籠めての弾奏振りに就いては、何人と雖も敬服せざるはないであらう。」（嶺南, 1916: 1）と演奏の様子を中心に評価をしている。その一方で『音楽と文学』に掲載された大田黒元雄による批評では、「公正な批評家としての立場からこゝに（……）所感を簡単に書く。」とした上で、演奏全体について「私は委しい事を書きたくない。それは当日の久野氏が（……）心の平静を欠いて居たと思はれるからである。何故ならば其の演奏はすべて安定を欠いて居た。そしてそれは熱情に富むと云ふよりはヒステリックであつたと私は思ふ。」（大田黒, 1916: 29）と評価した上で各曲の演奏のタッチや彼女の感性の鋭さを評価している。このように、大田黒は「批評家」という自覚の下で同時期の新聞の批評よりも詳細に演奏を記述し、その巧拙を評価した。しかし、白井が演奏の欠点を指摘しなかったのは、彼が演奏に関する記事を書く際に「どうすれば世間の人にモツと聴かせることができるか」（白井, 1932: 49）という、演奏者ではなく聴衆への西洋音楽の啓蒙を重視したためと

考えることができる。

V. まとめ

最後に本稿の内容をまとめ、その成果と課題を提示する。

本稿は明治・大正期の新聞における西洋音楽の演奏を対象とした批評の展開を整理することを通じ、それが同時代の新聞と音楽界においてどのような意味を持ったのかを提示した。本稿が明らかにした点は以下の3点である。

1点目は、新聞における演奏批評は、日清・日露戦争後に起きた新聞間の販売競争において、文芸記事を重視する方針の一環として掲載され始めた点である。これは、同時期に文芸作品を愛好した学生などの新興知識人が西洋音楽の聴衆として現れ始めたことによるものであり、彼らを読者として獲得することを目的としたことが考えられる。そのため、経営不振に陥っていた新聞とは逆に、『万朝報』などの下層読者や新しい知識人まで幅広い読者層を獲得し、多くの発行部数を誇っていた新聞には、演奏批評は見られない¹³。

2点目は、演奏批評の執筆者は、西洋音楽に慣れ親しんだ新聞記者が多いという点である。これは、明治30年代以降の大学や専門学校への進学率増加を背景に、高等教育を受けた人々を新聞社が雇用したことによる。その中で、学内の音楽団体やキリスト教を通じて西洋音楽を見聞きしていた学校卒の人物が新聞記者として雇用され、文芸記者として美術記事を書く傍ら演奏批評を掲載した。明治40年代以降、新聞社において他の記者とは異なるものとして音楽記者が位置づけられ、それとともに、音楽記者としての自覚のもと、団体の結成や音楽家との交友をする記者が現れ始めた。しかし、新聞の読者は音楽家や音楽愛好家だけではないことから、編集などによる制限があったことにも、注意が必要である。

3つ目に、新聞の演奏批評に対する批判という形で、演奏批評については「音楽批評」に対する議論が形成されたことである。新聞での演奏批評に対し、音楽界はその評価の妥当性を批判した。それとともに、音楽家は音楽雑誌と新聞で演奏批評を掲載した。また、演奏批評を担当した音楽家によって音楽批評論が展開され、音楽界を牽引する存在を理想とした「音楽批評」が主張された。そしてこうした新聞の演奏批評に対する問題意識は、「批評家」を自任し、当時最新のヨーロッパの音楽の紹介に努めた『音楽と文学』の同人に引き継がれる。その一方で、「音楽記者」側が重視したのは、あくまで聴衆への啓蒙という点であった。ここに両者の演奏批評に対する態度の違いをみることができる。

こうした演奏批評に対する論及は、劇評や美術批評のように¹⁴ 読者からの反応が見られないため、あくまで当事者の中で展開されたことに注意が必要である。しかし本稿の成果は、明治・大正時代の新聞での演奏批評の展開を、西洋音楽受容史の視点から、西洋音楽の新聞および新聞記者への広

¹³ 例えば、演奏批評が最も多く掲載された1905年の場合、演奏会の予告記事は掲載されているが、それに対する「批評」と付けられた記事は掲載されていない。演奏会の様子を取り上げた記事でも、「和洋の音楽が数曲あったが、中でも男声四部合唱と吉住一派の長唄は非常に喝采を博し〔……〕兎に角近来になき盛会であつた」（一記者、1905: 3）と、演奏会の様子を短く報じるだけである。

¹⁴ 例えば『読売新聞』の投書には、『都新聞』の美術批評よりも満足のいく批評を求めるもの（四半ブル、1902: 4）、東京と大阪の新聞に掲載された劇評を比較したもの（金沢、1908: 6）が寄せられている。

がり、ひいては日露戦争後の1905年を境にした、西洋音楽を新聞紙上で論じることを重視する流れの誕生として、日本の音楽史に位置づけたことにある。

しかし、本稿は以下のような課題を残している。1点目に音楽ジャンルの限界である。本稿は西洋音楽にジャンルを限定したが、同時期に日本音楽を対象とした演奏批評も掲載され始めている。西洋音楽の批評が日本音楽に対する評論ひいては価値判断においてどのような影響をもったのかは議論の余地がある。2点目に地域の限界である。本稿は東京で発行されている新聞を対象としたため、西洋音楽が演奏されていた他の地域にも、東京での西洋音楽に対する批評の方法は広がりがあったのかについては触れることができなかった。3点目に、メディアの限界である。本稿は新聞を対象にしたが、同時代の演奏批評は音楽雑誌や文芸雑誌にも掲載されている。特に明治40年代の雑誌に掲載された演奏批評には新聞記者ではなく、音楽家や旧制高等学校出身者といった、同時代の演奏者と聴衆が書き手となったものが多い。こうした雑誌との比較により、演奏批評の各メディアにおける共通点と差異を提示することができる。この他にも本稿は、演奏批評の内容と新聞ごとの演奏批評の違いについて触れなかった。

以上の点を解決した上で、本稿の成果と比較することで、日本音楽史における演奏批評、ひいては「音楽批評」の位置づけとその意義を示すことができるだろう。

謝辞

本稿は西村真次の史料（『家庭日記』）を引用するに当たり、早稲田大学歴史館に閲覧の便宜を図っていただいた。ここに謝意を表す。

参考文献

- 有山輝雄（2007）『陸羯南』（人物叢書新装版）吉川弘文館。
 海老澤敏（2002）「音楽批評」海老澤敏ほか（監修）『新編 音楽中辞典』音楽之友社、123頁。
 上沼八郎（1962）『伊沢修二』（人物叢書98）吉川弘文館。
 木村直恵（2002）「『批評』の誕生——明治中期における〈批評〉〈改良〉〈社会〉」『比較文学』45号、7-22頁。
 小林弘忠（2002）『ニュース記事にみる日本語の近代』日本エディタースクール出版部。
 権藤敦子（1989）「明治・大正期の演歌における洋楽受容」『東洋音楽研究』53号、1-27頁。
 白石美雪（2010）「明治初期の新聞における音楽評論の萌芽——『東京日日新聞』における福地源一郎の社説をめぐって」『武蔵野美術大学研究紀要』41号、47-58頁。
 ——（2012）「演奏批評・楽評と称する批評の形成——1898（明治31）年『読売新聞』の音楽批評」『音楽研究——大学院研究年報』24号、17-32頁。
 瀧井敬子（2018）『夏目漱石とクラシック音楽』毎日新聞出版。
 長木誠司（2010）『戦後の音楽——芸術音楽のポリティクスとポエティクス』作品社。
 東京芸術大学百年史編集委員会（編）（1987）『東京芸術大学百年史 東京音楽学校篇 第1巻』音楽之友社。
 中曽根松衛（1990）『音楽ジャーナリスト入門——マッチ、ポンプといわれた男』芸術現代社。
 中村義一（1981）『日本近代美術論争史』求龍堂。
 西澤忠志（2019）「日本における「演奏批評」の誕生——第一高等学校『校友会雑誌』を例として」『文芸学研究』第22号、38-55頁。
 ——（2021）「明治時代における新聞での演奏批評記事目録——1890-1916年までの7紙における演奏批評から」『人文×社会』1号、517-525頁。
 野村光一（1956）「日本の音楽批評」『音楽芸術』14巻6号、15-17頁。
 馬場健（1959）「音楽批評」下中邦彦（編）『音楽事典 第1巻』平凡社、459-465頁。
 春原昭彦（2003）『日本新聞通史——1861年-2000年 四訂版』新泉社。
 土方正巳（1991）『都新聞史』日本図書センター。

- 平田公子 (2012) 「音楽取調掛の俗楽観」『福島大学人間発達文化学類論集』15号, 27-36頁.
- 二子千草 (2017) 「小松耕輔の楽壇活動——音楽の社会的発展を目指して」小松耕輔音楽兄弟顕彰会・由利本荘市教育委員会 (編) 『小松耕輔生誕130年記念誌』11-22頁.
- 堀内敬三 (1942) 『音楽五十年史』鱒書房.
- 南田勝也 (2018) 「変わりゆくコンテンツ——鑑賞からプレイへ」辻泉・南田勝也・土橋臣吾 (編) 『メディア社会論』有斐閣.
- 門奈直樹 (1999) 「解説——明治三〇年代の『毎日新聞』」毎日新聞社 (編) 『毎日新聞 復刻版』不二出版.
- 矢内賢二 (2011) 『明治の歌舞伎と出版メディア』ペリカン社.
- 山本武利 (1978) 『新聞と民衆——日本型新聞の形成過程 新装版』紀伊國屋書店.
- (1981) 『近代日本の新聞読者層』法政大学出版.
- (1990) 『新聞記者の誕生——日本のメディアをつくった人びと』新曜社.
- 読売新聞社社史編纂室 (1955) 『読売新聞八十年史』読売新聞社.

Dingle, Christopher and Dominic McHugh. (2019) "Stop the Press? The Changing Media of Music Criticism." In *The Cambridge History of Music Criticism*, edited by Christopher Dingle, Cambridge: Cambridge University Press, 695-706.

Maus, Fred Everett. (2001) "Criticism." In *The New Grove Dictionary of Music and Musicians*, edited by Stanley Sadie, 2nd ed, London: Macmillan Publishers, 670-698.

参考史料

- 安藤弘 (1908) 「音楽の批評に就て」『日本及日本人』481号, 100-102頁.
- 板倉町史編さん委員会 (1978) 『板倉町史 別巻1 (資料編 板倉町における足尾銅山鉱毒事件関係資料)』[板倉町史基礎資料 第62号] 板倉町.
- 一記者 (1905) 「恤兵慈善音楽会 (昨夜)」『万朝報』1905年4月15日3面 [「萬朝報」刊行会 (編) (1986) 『萬朝報』51, 日本図書センター].
- S.I. [伊藤蘇水] (1891a) 「社説 音楽改良論 (一)」1891年8月1日1面.
- (1891b) 「社説 音楽改良論 (四)」1891年8月4日1面.
- 伊藤蘇水 (1893) 『蘇水遺稿』近藤彝六.
- 大田黒元雄 (1916) 「演奏会月評」『音楽と文学』1巻11号, 29-30頁.
- 金沢立公 (1908) 「ハガキ集」『読売新聞』1908年3月31日, 6面.
- 玉巖 [小松耕輔] (1908) 「発刊に際して」『音楽界』1巻1号, 9-10頁 [(1995) 『音楽界 復刻版』大空社].
- 幸田幸・由比こめ子 [由比くめ] (1896) 「同声会演奏批評に就いて」『読売新聞』1896年11月17日, 1面.
- 警視庁 (編) (1997) 『警視庁統計書 明治27年~明治29年』クレス出版.
- 高等師範学校附属音楽学校 [東京音楽学校] (1900) 「明治三十二年年度年報」(東京藝術大学総合芸術アーカイブセンター. <https://archive.geidai.ac.jp/8067/nggallery/page/5>, 最終確認2023年11月6日)
- 白井嶺南 (1930) 「二十五年前の音楽批評 (上)」『音楽世界』2巻12号, 24-28頁.
- (1932) 「白井嶺南氏音楽記者三十年を語る」『音楽世界』4巻9号, 34-51頁.
- 四半ブル (1902) 「はがき集」『読売新聞』朝刊1902年3月22日4面.
- 西村眞次 (1907) 『〔日記〕明治四十年 家庭日記』博文館.
- 長谷川如是閑 (1957) 「鉄腸と私——記者時代の安藤君」安藤正純先生遺徳顕彰会 (編) 『安藤正純遺稿』安藤正純先生遺徳顕彰会, 645-650頁.
- 樋口一葉 (1895) 『水のうへ日記』[鈴木淳・樋口智子 (編) (2002) 『樋口一葉日記』岩波書店].
- 編者 (1897) 「評林」『音楽』第74号, 31頁. [(1984) 『音楽雑誌 復刻版』出版科学総合研究所].
- 三輪源造 (1943) 「思出……明治廿九年以来」白井すめ (編) 『白井嶺南追憶集』, 31-36頁.
- 無署名 (1891) 「同好会の音楽会」『読売新聞』1891年3月14日, 2面.
- 無署名 (1893) 「雅楽協会の演奏」『読売新聞』1893年11月24日, 3面.
- 無署名 (1896) 「〔雑報〕同声会音楽界の短評と弁護」『音楽』第64号, 39頁 [(1984) 『音楽雑誌 復刻版』出版科学総合研究所].
- 無署名 (1904) 「社告」『日本』1904年11月30日, 1頁 [(1991) 『日本 復刻版』ゆまに書房].
- 無署名 (1906) 「新聞社内状調」「新聞紙通信社一覽」「新聞紙通信社一覽表」[原敬文書研究会 (1987) 『原敬関係文

書 第八卷書類篇五』日本放送出版協会].

鎗ン坊（1914）「初春の芝居」『東京日日新聞』朝刊1914年1月10日，6面.

揚子生（1921）「創立十五周年を迎える音楽記者倶楽部」『月刊楽譜』第10巻5号，1921年，23頁.

四谷のちか（1898）「月曜付録 萩岡松柯氏の琴曲合奏会批評（一）」『読売新聞』別刷1898年6月13日，2面.

嶺南〔白井嶺南〕（1916）「久野久子氏の独奏」『都新聞』朝刊1916年12月6日，1面〔中日新聞社（監修）（1994）『都新聞 復刻版』柏書房].

データベース

「ヨミダス歴史館」(<https://database.yomiuri.co.jp/rekishikan/>)

本稿が参照したデータは、西澤（2021）を参照しつつ、確認調査を行い適宜修正した（https://researchmap.jp/multidatabases/multidatabase_contents/detail/298734/53eddd419299e6f4fee14c4bb2a9dc8?frame_id=688150）
最終確認2023年11月6日。